

連載講座

第35回

続 七分積立金・渋沢栄一

作家 童門冬二

深夜の騎士救急隊

今回は私事から書かせていただく。山中湖畔(山梨県)に書庫兼娘のアトリエを兼ねた山小屋を持っている。東京の仕事部屋に収めきれない本を収納している。今度仕事部屋を移動したので大量の山小屋行き書籍が出た。運びこんだ本を整理中、つまずいて額を書棚の角にぶつけた。たちまち血がほとぼしる。布でおさえたが止らない。「とにかく朝までこのままでがまんする」という私の主張に娘は首を振った。「もう真夜中近い。お医者さんも無理」ということで、地元の知人に連絡先を教してもらって、救急車にきてもらった。ドライバーさんのほか二人の隊員。後期高齢者の私(それも他地域人)に対し、実に親切だった。隊員が交替で私の出血を絶え間なくおさえてくれる。麓の富士吉田に赤十字病院があって、ここでも温かく迎えてくれた。救急隊はお大事にと告げて、淡々と去った。

病院で治療を受けて山小屋に戻ったが、その後救急隊の方にきちんとお礼もいっていない。あの夜の隊員たちの対応が余りにもさわやかだったからだ。あの時私が隊員たちに感じたのは、

「深夜の騎士」ということだった。「私心を忘れひたすらに病人やケガ人に愛を注ぐナイト(騎士)たちだ」という感をつよく抱いた。生涯忘れない。騎士だというのは、隊員たちの礼儀正しい、しか

も職務遂行に遺漏のない紳士(ジェントルマン)的ふるまいのことである。

七分積立金の使途

考えてみれば前号に書いた“七分積立金”の最終処理に当たった、西郷隆盛と勝海舟のやりとりも、日本の騎士道(武士道)によるものだった。二人共私心はない。ただ「江戸市民のためにはどうすればよいか」、というのが判断基準だ。

七十万両とかいわれる巨額の積立金は東京府知事に渡された。府知事は一翁という号を持つ大久保忠寛だ。ペリーが来航した時に幕府は未曾有の困難に対応するために、身分をとわず有能な人物を求めた。開明的な老中(総理大臣)阿部正弘の命で、ボロボロな家に住んでいた勝を発見し、登用したのが大久保だ。大久保は將軍徳川慶喜に“大政奉還”をすすめた。維新後徳川家が駿府(静岡市)で七十万石の大名として名を残されると、大久保は静岡に行って家老になった。そして財政を任せたのが渋沢栄一だ。大久保はその後新政府に招かれ東京府知事になった。

大久保府知事は「七分積立金」の使途について「委員会」をつくった。委員長を依頼したのが渋沢栄一だ。この辺の人事をみていると、西郷・勝・大久保・渋沢たちをつなぐのは、強力な“信頼の糸”だと思わざるを得ない。そして、

「やはり大事業をなしとげるのは人間だ」

と思う。その人間も志を同じくする者の“協同心”によるところが大きい。その協同心を保全するのは、相手への“疑いのない信頼心”だ。

若いころ、開国によって諸物価が高騰し国民が生活に苦しむのをみて、渋沢は、

「開国は悪だ。それをおこなった幕府も悪だ」と考え、過激な攘夷論者になった。たまたま知りあった一橋（徳川）慶喜から、その小ささを指摘され「武蔵（埼玉・渋沢の出身地）の魚でなく、日本の魚に世界の魚になれ」とさとされる。渋沢は転心する。慶喜の家臣となって財政を担当する。

慶喜と親しかったナポレオン三世がパリで万国博覧会を開く。慶喜も招かれる。しかし幕府が潰れるかどうかの時期なので、慶喜は弟を代理にし、使節団の事務長に渋沢を充てる。渋沢はパリで株式と銀行制度を学び、これを日本に持ちこもうと決意する。

しかし日本に戻ると主人の慶喜は“朝敵”とされ、静岡市内の寺の一室でひげぼうぼうで痩せ細っていた。ひと目みた渋沢は涙がこみあげた。（東京へ行って銀行を開き、株式の仕事をしようと思ったがやめた。慶喜様のおそばでお仕えしよう）と忠誠心を燃え立たせた。渋沢の心に残る“日本人の心”のよさだ。渋沢はその日から慶喜のため、失業した旧幕臣のため、そして静岡藩のために努力する。旧幕臣のためには茶づくりをすすめる。

その手腕を認められ、渋沢はやがて政府に招かれ「税制度と政府組織の改正案の作製」を依頼される。そして東京府知事になった大久保から「七分積立金の精算」を依頼されたのだった。

委員長になった渋沢の頭の中には、パリでみた諸制度や施設の姿が頭にあった。

・上水道だけでなく下水道のすばらしさ。ビクトル・ユゴーの書いた“レ・ミゼラブル”の中で、ジャン・バルジャンが盗んだ燭台を高く掲げて立って走れるほどの高さを持っている。だから

こそ汚水も川のように流れることができる。

・耐火都市としての建築物のコンクリート化
・防火・消火組織の整備と市民の参加の確立
・病人や弱者に対する福祉施設の整備強化
など、一部門だけ思い出してもいまの日本の現況はくらべものにならない。委員会とはいってもパリ帰りの渋沢の知見には、ほかの委員はかなわない。

「委員長におまかせします」

ということが多かった。委員会は、

・何といってもきっかけになった“小石川養生所”改め「東京市立養育院」の整備拡充に力を注ぐ。
・養育院に孤児院を併設する（渋沢の主張）。
・東京にはよい飲み水が少ない。上水道を整備する。これは消火用水の確保にもなる。
・東京の道路では馬糞が舞い狂っている。市民にとって非衛生極まりない。道路整備が急務、併せて下水の処理施設も。
・東京の近代化を示すため、築地地区を浄化して日本の意気を示す。

などの事業に使うことにきめた。いずれも大事業で七十万両は完全に消化された。

この時渋沢は大久保に願い出た。

「お願いがあります」

「何だね」

「私を養育院長にして下さいませんか」

「ほう」

「それも死ぬまで」

「何だって」

大久保は驚いた。渋沢は終生養育院長をやりたいたいというのだ。これは実現する。

“日本資本主義の祖”といわれる渋沢は、五百も六百も会社を興したり潰したりした。すべてが澄んだ水のようなわけにはいかなかったと思う。養育院長（兼孤児院長）は、かれにとって、“清い棲息次元”の役割を果たしたのだろう。昭和六年、九十二才で死ぬまでかれの名刺から「東京市立養育院長」の肩書が消えることはなかった。